

「構成的イロニー」再考 ——新版ムージル全集における 『特性のない男』の編集上の問題をめぐって¹

桂 元嗣

序論

ヴァルター・ファンタ編集によるローベルト・ムージルの新しい全集 (Gesamtausgabe) が、ザルツブルクのユンク・ウント・ユンク社から2016年より刊行されている。全12巻中、未完の長編小説である『特性のない男』は第1巻から第6巻までを構成している。遺稿部分を含め、新版全集としては『特性のない男』はすべて刊行されたことになるのだが、実はこの書籍版全集の刊行と並行してWeb上で「ムージル・オンライン」(<http://musionline.at>) というポータルサイトがスタートしている。現状ではまだ機能は限定的だが、これまでに出版されたムージルのテキスト、初版、手書きの遺稿、ムージル自身の手による修正箇所、編集の際に生じた異同についてのコメント等に誰もが無料でアクセスできるようになっている。

2009年にヴァルター・ファンタ、クラウス・アマン、カール・コリーノらの手によって、今回の全集の前身となるムージルの歴史批判校訂版 (通称：クラーゲンフルト版) がDVD形式で刊行された際、編集者はこのクラーゲンフルト版をもとにして「書籍版の全集と注釈付きのオンライン版歴史批判校訂版全集を並立させたハイブリッド形式」²を刊行するプランをすでに表明していたのだが、その背景には『特性のない男』が1932年に第二巻第38章までが部分刊行された

¹ 本稿は、2018年日本独文学会秋季研究発表会(9月29日・名古屋大学)での口頭発表「構成的イロニー再考—新版ムージル全集における『特性のない男』の編集上の問題とカカーニエン構想について」で用いた発表原稿に加筆修正をほどこしたものである。

のちに1942年の作者の死によって未完に終わり、残された膨大な草稿がこれまで幾度にもわたって編集されては批判を浴びてきた歴史が関係している。端的に言えば、それは1978年にローヴォルト社から刊行され、現在流通している最もスタンダードな版であるアドルフ・フリゼー編集の『特性のない男』が、1952年に刊行されたフリゼー版の批判を踏まえて新たに編集し直されたものであったにもかかわらず批判校訂版としては不十分であったこと、さらにフリゼー版の流通によって、このロマンが「誰もけって通読したことのないロマンである」というかばしからぬ評判 (zweifelhafter Ruf) が広まる原因となった³という認識が、クラージェンフルト版の編集者であるファンタにあったためである。とはいえ、1万ページを超えるとされるムージルの遺稿を「遺漏なく公開」⁴した歴史批判校訂版であるクラージェンフルト版も、「読めない」という点ではその発表当初から批判があった。⁵ 今回の新しい全集は、こうした批判を明らかに意識しつつ、クラージェンフルト版の成果をもとに『特性のない男』を「読める」ロマンとすべく、思い切った編集方針を取っている。結論を先に述べるならば、それは書籍としては批判校訂版たることを放棄しているということである。新しい全集における『特性のない男』は、ヴァルター・ファンタが文献学的な後ろ盾をもって作り上げたひとつの「入門書」である——本論ではこうした前提に立ったうえで、ファンタがこのような編集方針を取らざるを得なかった根本的な要因を、着想を得てはイデーを膨らませつつ異なる草案を増殖させていくムージル自身の執筆方法に見て取る。そしてムージルの執筆方法をふまえてテキストを解釈するうえでムージル研究の初期に注目されつつもその後ほとんど顧みられることのなく

² Beiheft. In: Robert Musil: Klagenfurter Ausgabe. Kommentierte digitale Edition sämtlicher Werke, Briefe und nachgelassener Schriften. Mit Transkriptionen und Faksimiles aller Handschriften. Herausgegeben von Walter Fanta, Klaus Amann, Karl Corino. Klagenfurt (Robert Musil-Institut der Universität Klagenfurt) 2009, S. 41.

³ Ebd., S. 18.

⁴ Ebd., S. 8.

⁵ Vgl. Bernhard Metz: Bücher, nicht Texte: Warum wir Musil in der Klagenfurter Ausgabe nicht lesen können. In: Massimo Salgaro (Hrsg.): Robert Musil in der Klagenfurter Ausgabe. Bedingungen und Möglichkeiten einer digitalen Edition. (Musil-Studien Bd. 42) München (Wilhelm Fink) 2014, S. 197-218.

「構成的イロニー」再考—新版ムージル全集における『特性のない男』の編集上の問題をめぐって 桂 元嗣

なった「構成的イロニー (die konstruktive Ironie)」に再び着目する意義について考える。その際、晩年のムージルが集中的に取り組んでいた第二巻の継続部分における主に隣人愛をめぐる草稿と、1930年代の時局の変化を受けて書かれたカカーニエン⁶の一都市に関する草稿という一見無関係に思えるテキストで共通して用いられている「フェティッシュ (Fetisch)」という、もともとシャルル・ド・ブロスが未開民族の崇拜に見出し、その後マルクスの経済学や19世紀の性科学を経てフロイトの精神医学など幅広い領域で考察されているイデー⁷を例に挙げて考察する。

1. 「最終版の原則」と「公開の度合い」

ここで図1【新版全集の目次 (第4巻・第5巻)】を確認していただきたい。これは『特性のない男』第二巻の継続部分がファンタ版でどのように掲載されているかを示したものである。大きく分けて見開きページ右の第4巻が第二巻の継続部分の草稿のうち、1937年～38年にウィーンのベルマン・フィッシャー社でゲラ刷りに至った20章とその書き換え部分である。左の第5巻はゲラ刷りに至る前に構想された1933年～36年の草稿である。左から右におよそ年代順になっており、一番右側に1942年に亡命先のスイス・ジュネーヴでムージルが死去することによって絶筆となった「夏の日息吹」の断章がある。

今回新たに『特性のない男』の遺稿を編集するにあたり、ファンタは二つの原則を挙げている。ひとつは「最終版の原則 (Prinzip der letzten Hand)」、すなわち「作品の最終稿だけが読者の目に届くべきだ」⁸という原則である。この原則に基づき、例えばゲラ刷り原稿にムージルが手を加えているような場合は、手

⁶ カカーニエンとは、ムージルが『特性のない男』の中で用いた造語で、1918年に瓦解したオーストリア＝ハンガリー君主国を指す。

⁷ フェティッシュおよびフェティシズムの基本概念については以下を参照。ポール＝ロラン・アスン『フェティシズム』、西尾彰泰・守谷てるみ訳、白水社、2008年、Johannes Endres: Fetischismus: Grundlagentexte vom 18. Jahrhundert bis in die Gegenwart. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 2017.

⁸ Walter Fanta: Nachwort des Herausgebers. In: Robert Musil: Gesamtausgabe. Bd.1. Herausgegeben von Walter Fanta. Salzburg (Jung und Jung) 2016, S. 524.

Erste Fortsetzungsreihe		Bd. 5	
39	Der Tugut		
40	Planmäßigkeit		
41	Auf der Himmelsleiter in eine fremde Wohnung		
42	Der Tugut und der Tunichtgut. Aber auch Agathe		
43	Beginn einer Reihe wundersamer Erlebnisse		
44	Mondstrahl bei Tage		
45	Hinter dem Gartengitter		
46	Die Hinauswendung		Neuansätze
47			47 Wandel unter Menschen
48			48 Die Sonne scheint auf Gerechte und Unaufgereehte
49	Ulrichs Tagebuch		49 Sonderaufgabe eines Gartengitters
50	Eine Eintragung		49 Nachdenken
51	Das Ende der Eintragung		
52	Die drei Schwestern		
Zweite Fortsetzungsreihe			
Parallektion			
- Beschreibung einer Kakanischen Stadt			
- Unterhaltungen mit Schmeißer			
- Warum die menschen nicht gut, schön und wahrhaftig sind, sondern es lieber sein wollen			
- Stumm und die Propheten			
- Graf Leinsdorf bei Ulrich			
- Konferenz bei Graf Leinsdorf			
Agathe			
- Agathe bei Lindner			
- Traum			
- Pyrrhussieg Agathes über ihrem Rechtsanalts			
- Peter und Agathe			
- Bonadea oder die Schülerin der natürlichen Liebe			
- Krisis und Entscheidung			
Clarisse			
- Frühspaziergang			
- Laubumkränzter Waffenstillstand zwischen Walter und Clarisse			
- Hermaphrodit			
- Vergewaltigung			
- Besuch			
- Insel			
Eine Art Ende			
(Schmierblatt Aufbau und Inhaltverzeichnis vom Herausgeber)			
1. Leo Fischei als Weltbote			
2. Politisch unverlässlich			
3. Gerda bei Ulrich			
4. Aussprache mit General			
5. Graf Leinsdorf und Hagauer			
6. Letzte Tagebuch-Eintragung			
7. Nachtfest			
8. Irenhaus			
9. Lindner			
10. Der geknickte Prometheus			
11. Schlußsitzung			
12. Agathe Ulrich Schluß			
Ulrichs Schlusswort			
Ulrichs Nachwort, Schlusswort			

図 1 【新版全集の目次 (第 4 巻・第 5 巻)】

(出典 : Robert Musil: Der Mann ohne Eigenschaften. In: Gesamtausgabe Bd. 1-6. Herausgegeben von Walter Fanta. Salzburg und Wien 2016-2018)

Druckfahnen-Kapitel(1937-38)		
39 Nach der Begegnung		
40 Der Tugut		
41 Die Geschwister am nächsten Morgen		
42 Auf der Himmelsleiter in eine fremde Wohnung		
43 Der tugut und der Tunichtgut. Aber auch Agathe		
44 Eine gewaltige Aussprache		
45 Beginn einer Reihe wundersamer Erlebnisse		
46 Mondstrahlen bei Tage		
47 Wandel unter Menschen		
48 Liebe macht blind. Oder Schwierigkeiten, wo sie nicht gesucht werden		
49 General Stumm läßt eine Bombe fallen. Weltfriedenskon		
50 Agathe findet Ulrichs Tagebuch		
51 Große Veränderungen		
52 Agathe stößt zu ihrem Mißvergnügungen auf einen geschichtlichen Abriß der Gefü hlspsychologie		
53 Die Referate D und L		
54 Naive Beschreibung, wie sich ein Gefühl bildet		
55 Fühlen und Verhalten. Die Unsicherheit des Gefühls		
56 Der Tugut singt		
57 Die Wirklichkeit und die Ekstase		
58 Ulrich und die zwei Welten des Gefühls		
Fortsetzung der Druckfahnen-Kapitel		
59 Nachtgespräch		
60		
61 Atemzüge eines Sommertags		
62 Das Sternbild der Geschwister oder Die Ungetrennten und die Nichtvereinten		
63 Versuche, ein Scheusal zu lieben		
64 Gartenkapitel mit General		

Bd. 4

Genfer Ersetzungsreihen

Zweite Ersetzungsreihe	Dritte Ersetzungsreihe
48 Eine auf das Bedeutende gerichtete Gesinnung und beginnendes Gespräch darüber	47 Wandel unter Menschen
49 General von Stumm über die Genialität	48 Liebe deinen nächsten wie dich selbst
50 Genialität als Frage	49 Gespräche über Liebe
	50 Schwierigkeiten, wo sie nicht gesucht werden
	51 Es ist nicht einfach zu lieben
	52 Atemzüge eines Sommertags (絶筆)

ファンタ版ではフリゼー版(1978)には掲載されていた次の2つの草稿は掲載されていない

52 Atemzüge eines Sommertags

50 Das Pferdchen und der Reiter

(* 数字の順序 (52, 50)はフリゼー版に準ずる)

書きの修正箇所を書籍版のテキストに反映させ、修正前の表現についてはオンライン版でのみ確認できるようになっている。こうした原則は複数の似たような草稿の採用基準にも反映されており、たとえばジュネーヴで書き換えの行われた「夏の日の息吹」とタイトルのついたふたつの草稿は、第二の書き換え系列（Zweite Ersetzungsreihe）におけるバージョンは書籍版では採用されず、絶筆となった第三の書き換え系列（Dritte Ersetzungsreihe）におけるバージョンのみ採用されている。⁹ ファンタの言葉を借りれば「マテリアルを並べ広げるよりは創作過程の最終結果を演出」することで、「文献学的な詮索に煩わされることなく、間違いなく世界的な文学のひとつに数え入れられるであろう作品を楽しんで読む」¹⁰ ことが求められているのだが、こうした選択から「作者の最終的な意図」を編集者なりにくみ取って、ゲラ刷りの39章から46章、その後枝分かれしてジュネーヴで死の直前まで書かれた第三の書き換え系列へと向かうロマンの生成過程を線的（linear）に提示しようとするファンタの編集方針が透けて見える。

もうひとつファンタが重視している編集上の原則として、「作品の公開の度合い（Grad der Publiziertheit）」¹¹ が挙げられる。つまり作品の公開は作者の最終的な意図の「権威づけ（Autorisierung）」¹² となりうる、という考え方である。全集第4巻に収録された遺稿の配列は、1978年刊行のフリゼー版『特性のない男』と比べると、フリゼー版がゲラ刷りまで至った20章の後にジュネーヴで死の直前まで執筆が行われた第三の書き換えの系列が続き、その後1910年代の「スパイ」構想まで一貫して時系列をさかのぼるように草稿が配列されるのに対し、ファンタ版はゲラ刷りの20章の後に、そのゲラ刷りに継続する形で書き進められた5つの章（第59章～第64章）を置き、さらにジュネーヴでの執筆過程が時系列順に追えるような配列をしている（図2【新版全集における『特性のない男』草稿の配列】参照）。これはウィーンのパルマン＝フィッシャー社で1937～38年に

⁹ ただしゲラ刷りの20章に継続する形で書き進められた5つの章にある第61章「夏の日の息吹」については掲載されている。

¹⁰ Ebd. S. 522.

¹¹ Ebd.

¹² Ebd.

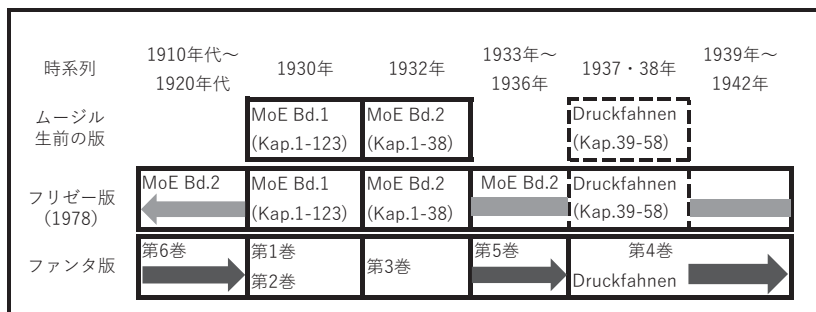


図2【新版全集における『特性のない男』草稿の配列】

ゲラ刷りまで進んだという「公開の度合い」を重視して全集での刊行を先行させたためであり、それ以前の1933年から1936年の草稿は公開されなかったゆえに作者ムージルの最終的な意図からは遠い「異なる美的原則に基づいて書かれた」¹³ものとして第5巻に回されている。その結果、巻数が進むにつれて時系列的にはさかのぼった初期の草稿が掲載されるのに対し、その内部においては時系列を追って草稿が配列されるというちぐはぐな構成となっている。

ファンタはフリゼー版で生じた編集における恣意性を回避するために先ほどの二つの明確な原則を打ち立て、それを遵守しようとしているのだが、そうした原則にとらわれるあまり、結果として時系列的には「作者の最終的な意図」に近いはずの草稿を外すという矛盾にも陥っている。その代表的な例が、本論で取り上げるモチーフを含んだ「仔馬と騎手 (Das Pferdchen und der Reiter)」という短い草稿で、ファンタ版全集では本来第4巻のジュネーヴ亡命時代における第二の書き換え系列に入っていたはずの草稿である。この草稿では主人公ウルリヒと妹アガーテが、隣人愛に代表される愛の「不気味なほど美しい原因のなさ」(GWI, S. 1251)¹⁴や、愛するという感情が人を盲目にするといった問いにまつわるテーマを中心に語り合う場面が描かれるが、内容的には明らかにゲラ刷りの第48章「愛は盲目にする、あるいは探索されない重要な問題」を反

¹³ Ebd., S. 523.

復している。またタイトルにある「仔馬」ないし「騎手」の話題が一切出てこないという点や、ひどく省略の多い書き方からも、この草稿はムージルが執筆に着手しつつも中断したものと判断できる。しかし、ファンタの「最終版の原則」に基づいて考えれば、こちらの方が時系列的にはファンタのいう「作者の最終的な意図」に近いはずである。だが、「公開の度合い」の原則にもとづいて考えると、むしろゲラ刷りまで至った章が優先されてもおかしくない。いずれにせよ原則に基づいては判断できない矛盾のなかで編集者であるファンタが「読める」ロマンを読者に提供することを優先させたために草稿が削除された一例といえよう。

2. 張り子の仔馬——イデーの生成過程を読む

ファンタが自己矛盾に陥る要因、それはムージルの執筆方法が本質的に「作者の最終的な意図」やその権威づけを打ち消す方向へと向かっているためである。それは結局のところ、物事にはつねに別の側面がありうるという、彼の可能性へのまなざしに根差している。『特性のない男』第一巻が刊行へと至ったように、第二巻の継続部分もまた結末へ向かって書かれている、それはそうなのだが、それとともにゲラ刷りの草稿を推敲し直し、草稿を枝分かかれさせ、果てにはすでに出版された第一巻を「清算 (Liquidierung)」してでも一つのモチーフを新たな問題に結び付け、さらに展開させようとする¹⁴ ムージルの生理にも似た欲求が

¹⁴ ムージル作品からの引用は、原則としてファンタ編集の新版全集 (Gesamtausgabe) を用いるが、比較をする必要上、またファンタ版にテキストがない場合を考慮して、引用頁の表記はファンタ版とともにフリゼー版の全集 (Gesammelte Werke) の頁数を併記する。引用に際して文献は次のように略し、巻数・頁数とともに文中に示す。

GA: Robert Musil: Gesamtausgabe. Bd. 1-6. Herausgegeben von Walter Fanta. Salzburg (Jung und Jung) 2016-2018.

GW1: Robert Musil: Gesammelte Werke Bd. 1. Der Mann ohne Eigenschaften. Hrsg. von Adolf Frisé. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1978.

GWII: Robert Musil: Gesammelte Werke Bd.2. Prosa und Stücke. Kleine Prosa, Aphorismen. Autobiographisches. Essays und Reden. Kritik. Hrsg. von Adolf Frisé. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1978.

¹⁵ Wilhelm Bausinger: Studien zu einer historisch-kritischen Ausgabe von Robert Musils Roman „Der Mann ohne Eigenschaften“, Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1964, S. 7.

「構成的イロニー」再考—新版ムージル全集における『特性のない男』の編集上の問題をめぐって 桂 元嗣

ある。¹⁶ 一例を挙げるとするならば、先ほどの「仔馬と騎士」の草稿自体には登場しない「仔馬」のモチーフは、すでに1932年、ローヴォルト社より部分刊行された『特性のない男』第二巻第3章「喪家の朝 (Morgen in einem Trauerhaus)」で、主人公ウルリヒが亡くなった父の家で幼年時代を思い出す場面に登場している。ウルリヒの父親がかつて所有していた大きくて筋肉質な馬の存在は、少年だった主人公ウルリヒが賛嘆してやまなかった対象であった。その思い出は「自分の願望を満たすことのできない子供の無力さ」ゆえに「この世のものとは思えない」(GA3, S. 39 / GWI, S. 689) ほどの無限の輝きを放っていたが、いつしかその思い出を凌駕するように、町のサーカスのポスターに描かれた馬やライオンや虎をハサミで切り抜いて集めることに熱中するようになる。

彼はこの彩色豊かなポスターの一枚を手に入れることに成功すると、動物たちを切り抜き、小さな木の台に貼りつけて支えにした。それから生じたことは、どれだけ飲み続けても渴きをいやすことのできない飲み物ぐらいとしか比較できなかった。というのも、その状態はとどまる (Halt) ことを知らず、何週間にもわたっていながら、なんの進展もなかったのだから。そしてそれは彼が賛嘆してやまない動物たちの中へとたえず吸い込まれていくこと (Hinübergezogen werden) だった。そのとき動物たちを所有しているという、孤独な子どものえもいわれぬ幸福感とともに、彼が同じくらい強く思ったのは、動物たちを見つめていても、最後の何かが欠けており、何によっても満たすことができないと自分が感じているということだった。(GA3, S. 39f. / GWI, S. 689)

¹⁶ 「ムージルはただひとつの計画にしたがって作業を進めることはけっしてなかった。いちどある計画を展開させると、展開されたイデーが構築されたその領域の内部においてまったく異なる仮定をもちい、さらに実験をつづけた。その結果、もともと計画ではもはや把握できないまでにそのイデー自体が展開した。そのようにしてさらなる計画が立てられたが、初期のイデーや古い計画が最終的にしりぞけられるようなことはなかった」 Francesca Pennisi: *Auf der Suche nach Ordnung. Die Entstehungsgeschichte des Ordnungsgedankens bei Robert Musil von den ersten Romanentwürfen bis zum ersten Band von „Der Mann ohne Eigenschaften“*. St. Ingbert (Werner J. Röhrig Verlag) 1990, S. 22.

「主体がそれを信仰しているかどうかとは無関係に魔術的な力が宿っている」¹⁷ものを広く「フェティッシュ (Fetisch)」と呼ぶならば、自らの尽きせぬ欲望の「よりどころ (Halt)」となる代替物を所有しようとしては「最後の何かが欠けており、何によっても満たすことができない」と幻滅を味わう少年ウルリヒのエピソードは、明らかにフェティシズム的な色彩を帯びているといえよう。このフェティッシュとしての作り物の馬に込められた魔術的要素は、ムージルの『特性のない男』においてはいくつかの異なるイデーと結びつきながら展開を続け、1937年～1938年にゲラ刷りにまで至った第二巻第48章「愛は盲目にする、あるいは探索されない重要な問題」においてふたたび登場することになる。ウルリヒはある郊外の菓子屋のショーウィンドウに仔馬の形をした砂糖菓子の入れ物が飾ってあるのを発見し、すぐさまそれを購入するのである。この張り子の仔馬は、「心的に人を磁石のように引きつけるモノ (kleines seelisch-magnetisches Ding)」(GA4, S. 115 / GWI, S. 1109)として彼と妹との間に置かれ、相手のことをよく知らないままに隣人を愛せるのか、愛は対象へと「絶えず吸い込まれ (hinübergezogen)」、自他の区別を失わせるような恍惚の中で人を一致させるのか、それともこの仔馬を愛するのと同じく「人形 (Puppe)」(GA4, S. 108 / GWI, S. 1104)を愛するかのようにならざるのみなのか、といった愛の問題について妹と語り合う契機となる。さらにいえば、次の第49章「シュトゥム将軍が爆弾を落とす。世界平和会議」においてこの仔馬の存在は、平行運動のサロンから姿を消し、現実世界から完全に身を引いたはずが、シュトゥム将軍の突然の訪問によって不意を突かれ、「自らの夢のもろさと不完全さ」(GA4, S. 123 / GWI, S. 1114)に放心状態になっている兄妹が、シュトゥム将軍とふたたび会話を交わすきっかけを作っている。軍人として馬の魅力を理解するシュトゥム将軍は、いささか大げさにこの張り子の仔馬を「偉大なる動物偶像 (der große Tiergötze)」、「聖なる動物 (das heilige Tier)」、「騎兵たちの崇拜の対象 (das angebetete Idol der Reiterei)」

¹⁷ Hartmut Böhme: Fetischismus und Kultur. Eine andere Theorie der Moderne. Dritte Auflage. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 2012, S. 13.

「構成的イロニー」再考—新版ムージル全集における『特性のない男』の編集上の問題をめぐって 桂 元嗣 (Ebd.) と呼ぶ。それによってそれまでウルリヒたちの間に漂っていたぎこちなさがほぐれ、愛の会話と感情心理学についての理論で埋めつくされそうになるロマンの世界に、平行運動のサロンで新たに話題になっている「世界平和会議」という、現実世界の話題との接点を与える役割を果たすことになる。

このように、仔馬というひとつのモチーフがさまざまな場面のイデーと結びつきつつ変奏される様子を中心にロマンを横断的に読むと、ファンタによって削除された草稿が、あえて「仔馬と騎士」というタイトルを用い、ゲラ刷りの第48章で登場する隣人愛や人形愛などのテーマを繰り返すことでムージルがいかなるイデーを展開しようとしていたのか、非常に興味がそそられる。しかし現行のファンタ版では、モチーフがイデーと織りなすテキストの網の目を書籍という線的な形式で表示することはあらかじめ放棄され、モチーフやイデーのテキスト横断的な検索と解釈はすべてデジタル版にゆだねられているのである。これまでの考察からも明らかなように、新たに全集が刊行されたものの、『特性のない男』の遺稿部分を権威づけられた草稿中心に時系列順に追うのは「入門書」としては十分かもしれないが、異なる計画を次々に打ち立てつつイデーを展開させようとするムージルの執筆方法をふまえて読むには、今回の書籍版全集は不十分であるといえる。

3. 構成的イロニー

ではデジタル版も併用するとして、ムージルの執筆方法を踏まえて読むにはどうすればよいか。本論では、ここでムージル自ら「構成的」(konstruktiv) と呼び、ムージル研究の初期に注目された彼のイロニーに改めて着目したい。とはいえこのイロニーについてムージル自身が語っている箇所は少ない。1978年のフリゼー版では1930年ごろから1942年までに書かれたとされる「遺書。覚え書き」と題された断片の中で次のように記述されるのみである。

イロニーとは、聖職者を描きながら、同時にそれがボルシェヴィキにも当てはまるように表現することである。まぬけな男を描きながら、作者が突然こ

れはわたし自身の一部ではないかと感じさせるように表現することである。この類のイロニー、構成的イロニーは今日のドイツではそれほど知られているわけではない。イロニーが裸のまま立ちあらわれるのは、事物の連関からである。(GWI, S. 1939)

1952年にアドルフ・フリゼーが『特性のない男』で初めてこの断片を掲載して以降、ムージルのイロニーについては様々な説明がされてきた。たとえば1956年に『イロニーと文学』を著したペータ・アレマンは、この断片を引用しながら、ムージルのイロニーは対象に対する優越を基調とした「息の短い当てこすり」ではなく、何十回と知れぬ推敲作業のなかでもはやイロニーとして感じられないほどまでに目立たなくなった「作品の全体構造 (Gesamtaufbau) の背景にあるひそやかな性質のもの」¹⁸とした。またヴォルフディートリヒ・ラッシュは、「構成的」という言葉をふまえつつ、ロマンの図式に当てはめながら具体的にイロニーが提示するものを解釈している。彼によると、「全ての登場人物は、隣接する別の登場人物においても変容したかたちで反復されるような、そうした考え方や試みを体現しており、とりわけウルリヒ¹⁹の特定の可能性や資質を一面化、誇張化したかたちで示している。」²⁰つまり双子の妹ともいわれるアガテにせよ、幼友達のヴァルターにせよ、軍人時代の同僚シュトゥム将軍にせよ、快楽殺人犯モースブルッガーにせよ、あるいは現実のモラルに縛られた愛に苦しむアルンハイムやデオーティマにせよ、いずれの登場人物も主人公ウルリヒの一要素を担った「鏡像ないしは対照としての存在」²¹であり、こうした各登場人物の担う要素の連関がロマンの構成を担っているという図式である。

¹⁸ Beda Allemann: *Ironie und Dichtung*. Unterjesingen-Tübingen (Günter Neske Pfullingen Verlag) 1956, S. 181.

¹⁹ 1952年の版はフリゼーが草稿の登場人物の名を勝手に決定稿の名に合わせている。したがってラッシュがウルリヒについて語る時、それは草稿段階におけるアキレスともアンダースとも受け取れる。

²⁰ Wolfdietrich Rasch: „Der Mann ohne Eigenschaften“. Eine Interpretation des Romans. In: Renate von Heydebrand (Hrsg.) : Robert Musil. (Wege der Forschung Bd. 588) Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1982, S. 87.

²¹ Ebd.

興味深いのは、ミュージルの構成的イロニーについての研究は、1952年刊行のフリゼー版に基づいて解釈されたものが最も多く、成立年代順に草稿が整理された1978年のフリゼー版が刊行されて以降は、いくつかの例外²²を除いてはほとんど取り上げられなくなるということである。²³1910年代から40年代までの異なる年代の草稿をパッチワークのようにつなぎ合わせて編集したとして批判された1952年のフリゼー版『特性のない男』の草稿では、たとえばヴァリエテ歌手レオーナが、平行運動の女主人ディオティマとプラトニックな恋愛に陥る大富豪アルンハイムのアヴァンチュールの相手として現われる。²⁴現行の『特性のない男』の読者にとっておよそ予想だにできなかったようなかたちで登場人物たちが結びつけられているのは、当時のフリゼーが異なる美学にもとづいて形成された古い草稿、たとえば行動的な主人公アンダースが活躍する「スパイ」や「双子の妹」時代の草稿を、冷静沈着な主人公ウルリヒの活躍する『特性のない男』のテクストにつなぎ合わせたためである。しかし意外な結びつきのように思われるかもしれないレオーナとアルンハイムの結びつきも、ディオティマがすでに結婚しており、当時の社会的立場からアルンハイムの欲望が阻害されていることを考え合わせれば、レオーナとアルンハイムという組み合わせはいかにも納得がいく。²⁵つまり異なる時代の草稿を結び合わせることによって登場人物の「ひょっとしたらそうであったかもしれない」一面が、結果的に鏡像のように映し出されていたのである。その意味で1952年のパッチワーク版『特性のない男』では、登場人

²² Vgl. Wilhelm Braun: Ferdinand Stader, Die Schwärmer und die konstruktive Ironie. In: Gudrun Brokoph-Mauch (Hrsg.): Robert Musil: Essayismus und Ironie. Tübingen (Francke) 1992, S. 115-122.

²³ ミュージルの研究史については以下を参照。Vgl. Robert L. Roseberry: Robert Musil. Ein Forschungsbericht. Frankfurt am Main (Athenäum Fischer) 1974; Birgit Nübel Norbert Christian Wolf (hrsg.): Robert Musil Handbuch. Berlin Boston (Walter de Gruyter) 2016.

²⁴ 1920年代後半に書かれた章群 (Kapitelgruppe) と呼ばれる構想のうち、ファンタ版では「ディオティマの誘惑 (Diotimas Verführung)」とタイトルつけられた草稿を参照。Vgl. GA6, S. 674-689 (bes. S. 679f.). ただしこの草稿はフリゼー版では「園遊会 (Gartenfest)」とタイトルがつけられている。Vgl. GW I, S. 1615-1621.

²⁵ 拙著『人類が全体としてみる夢—ローベルト・ミュージル『特性のない男』』、コンテンツワークス社、2008年、13頁。

物の異なる一面がさらに合わせ鏡のように主人公ウルリヒのありえたかもしれない一面として映し出され、そのような可能性の編み物として構成的イロニーが広く解釈されてきたのではないだろうか。ただしそうしたムージルのイロニーに基づいた作品解釈も、1964年にヴィルヘルム・パウジンガーがフリゼーの編集方針を批判し、その批判を受けてフリゼーが1978年に新たに草稿が成立年代ごとに整理された『特性のない男』を出版、そしてその版が全集版として流通したことによって下火になったものと思われる。

4. 「カカーニエンのとある都市についての記述」

これまで確認したように、ムージルの構成的イロニーは、「聖職者を描きながら、同時にそれがボルシェヴィキにも当てはまる」かのごとく、一見無関係に思える登場人物同士を、あるいは当人を描いているのか疑わしくなるくらい異なる草稿同士を「ひょっとしたらそうであるかもしれない」可能性とともに結び付ける。本論ではこれをふまえ、ムージルのイロニーがさらに、もはやイロニーとして感じられないほどまでに目立たず、それゆえにまったく思いもよらぬ形で『特性のない男』の異なる時代の草稿の異なる場面を結びつけつつロマーンを構成している点を明らかにしたい。このことを確認するために、最後に「カカーニエンのとある都市についての記述」と題された草稿を分析する。

ファンタ版全集の第5巻に1933年～1936年の『特性のない男』第二巻の継続部分に関する草稿として取められた、章番号のないこの草稿は、1933年ごろ、すなわちドイツでナチス政権が樹立したという時局の変化を受けて書かれたものの、ゲラ刷りの20章に採用されることもなく中断した構想のひとつである。ここでは第二巻の舞台でもあるB市、すなわちムージルが青春時代を過ごしたブリュン（現チェコのプルノ）と思しき都市で平行運動に反対するデモが起こったことを報告しに来たシュトゥム將軍と、突然の訪問に驚くウルリヒとアガーテとが会話を交わす場面が描かれている。この場面設定自体は明らかにのちに書かれるゲラ刷りの第49章「シュトゥム將軍が爆弾を落とす。世界平和会議」を先取りしたものである。しかし書かれている内容は大きく異なる。ゲラ刷りの第49

「構成的イロニー」再考—新版ムージル全集における『特性のない男』の編集上の問題をめぐって 桂 元嗣

章では、「世界平和会議 (Weltfriedenskongreß)」なる会議がウィーンで行われることが突如決まり、会議開催にあわせて行われる民族衣裳の祝賀行列といった案が浮かんでは消えるいつもの平行運動のサロンの様子がシュトゥム將軍によって報告されている一方、こちらの草稿は、紡績・繊維工業で栄えたB市をめぐる歴史を中心に語られている。つまりモラヴィアの中心地であるB市に共存していたドイツ系住民とチェコ系住民がいつしか反目し合い、そうした対立が世界大戦の火種 (ein Herd des Weltkriegs) となっていくその背景についての考察が中心に描かれているのである。ムージルはこの内容の異なる草稿と草稿の間でいかなるイデーを展開しようとしていたのだろうか。

「カカーニエンのとある都市についての記述」は、もともとムージルが1920年代後半にエッセイ風にした「B市 (Die Stadt B.)」という、ファンタ版全集の第6巻 (1920年代の構想をまとめた巻) に収められている草稿がもとになっている。この初期の草稿で、B市はモラヴィア地方におけるいわゆる「ドイツ語の言語島」(GA6, S. 548) としてドイツ人とチェコ人が平和に共存する「カカーニエンにおけるもっとも模範的な形で混合がなされた地域」(GA6, S. 551) として描写される。しかし異なる民族が共存し、18世紀後半からは紡績・繊維工業で栄えたこの地方都市の背後には、不測の事態でこの調和が無秩序へと陥らないよう、あらかじめ軍事関連施設が各地に配置されていた。それが「風景や自然」(GA6, 553) のように溶け込んでいるというのがフランツ・ヨーゼフ時代に確立したカカーニエン的秩序であると説明されている。

警官は将校と同じ長さのサーベルを装備していた。新興の都市区域には国家によって都市が拡大するよりも前に、はるかに先んじて軍用病院、制服倉庫、輜重兵用兵舎が設置され、その巨大な長方形の建物はこの街の秩序にある種のよりどころ (Halt) を与えていた。[...] だからとって、これらすべてを軍国主義とみなしてはならない。カカーニエンは濡れ衣を着せられている。それはただの秩序なのだ。(GA6, S. 553)

「カカーニエンのとある都市についての記述」は、「B市」の記述を受け継ぎつつ、カカーニエンの典型的な地方都市であるB市の住民が、安定した秩序に基づく現状を受け入れる際に抱く「ぼんやりとした感情 (Zwielicht des Gefühls)」(GA5, S. 181 / GWI, S. 1446) について語られている。つまり、彼らは「あまりにも早く静まりこんでしまった静謐さに対する不安 (Unruhe einer zu früh herabgesunkenen Ruhe)」(Ebd.) を抱いているのである。というのも、多民族国家カカーニエンは本来さまざまな矛盾を内包する国家であることを彼らはみな知っているからである。B市で平行運動に対するデモが起こった際、シュトゥム將軍は「まさにこのB市でこうしたことが起こらざるをえなかった」(GA5, S. 176 / GWI, S. 1143) と断言する。というのも人々は、表向き秩序立っている現状に対するそこはかかない不安と、秩序の背景に可能性として見え隠れする無数の矛盾への予感で頭がいっぱいになって身動きが取れなくなっているからである。シュトゥム將軍はこれを「今日の人々がどうしても逃れることのできない耐えがたき知性主義 (der unleidliche Intellektualismus)」(GA5, S. 188 / GWI, S. 1450) と呼び、デモはこの知性主義から解放されて何かを成し遂げたいという人々の非合理的な情動の表れであると断定する。

「彼らはもはや複雑な知性など望んではいない。彼らは生きるのに無数の可能性など望んではいないのだ。彼らはともかく (ohnehin) 自分がしていることに満足していたいのだ。そのために彼らはまたとにかく (einfach) 必要とするのだ、信仰だとか、確信といったものであるとか——つまり、そのために必要なもの、これをなんと呼んだらいいだろうかね？」(Ebd.)

シュトゥム將軍はここで、無数の可能性を知的に考慮に入れることで生まれる「不安 (Unruhe)」を除去し、自分の現在していることにとにかく満足するために身をゆだねることのできる信仰や確信なるものに何か別の呼び名を与えようとしてウルリヒにたずねているが、彼自身はこれを「精神を一律にするもの (Eingeistigkeit)」(Ebd.) と呼び、「指導者の原理」こそがこの閉塞した状況に

「構成的イロニー」再考—新版ムージル全集における『特性のない男』の編集上の問題をめぐって 桂 元嗣
必要なのだと主張する。こうした記述は、明らかに当時政権を取ったヒトラーが人々の抱く「ぼんやりとした感情」に明確なイメージを与える指導者としての機能を果たしたがゆえに、熱狂的に受け入れられていく時代の状況をふまえているのではないだろうか。

結論

ムージルのこれまでに書かれたテキストをひも解くと、彼がこうした「ぼんやりとした感情」に具体的な形を与え、人びとの心の安定をもたらし、精神を一律にする指導理念や対象に「フェティッシュ」の呼び名を与えて考察していることがわかる。例えば1922年に発表されたエッセイ「寄る辺なきヨーロッパ、あるいはとりとめもない旅」では、人々が発明した「フェティッシュ」(GWII, S. 1087)として〈新時代のはじまり〉といったスローガンや、〈国民国家〉、〈人種〉、〈カトリック教義〉、〈直観的人間〉といった理念を挙げている。そのように考えると、おそらくゲラ刷りの第49章で中心的な話題として描かれることになる〈世界平和会議も、いつまでも決着のつかない平行運動の議論に具体的な形を与えることのできる一種の「フェティッシュ」とみなしてよいだろう。つまり、B市のデモの考察において取り出された、知性を否定し「指導者」を熱狂的に求めようとする人々の非合理的な情動のメカニズムは、「世界平和会議」という、一見異なる、しかもデモが象徴する暴力とは最も遠いところにあるように思われる平和をめぐるテーマを中心に描いている草稿においても見出すことができ、そのようにして『特性のない男』で描かれるイデーは異なるモチーフや場面と次々に結びつきながら展開しているのである。

さらに興味深いと思われるのは、主人公の兄妹とシュトゥム将軍とが人々のフェティッシュとして機能する「指導者の原則」や「世界平和会議」について議論を交わすまさにその場に、ウルリヒのフェティッシュである張り子の仔馬が置かれているということである。つまりムージルが死の直前まで考察した、人を愛するという自他の区別を失わせるような恍惚がもたらす情動のメカニズムは、ヨーロッパ世界を破壊し、みずからの執筆の機会を奪う指導者を熱狂的に求め、

恍惚の中で合一する人々の暴力的な情動でもありうるという可能性を、一見そうとはわからぬ形で作品構造の背後にひっそりと示しているのである。それこそがムージルの構成的イロニーではないだろうか。

*本研究は JSPS 科研費 20K00508 (基盤研究 (C)「断絶と継続の中欧文化における「特性のなさ」をめぐる研究」) の助成を受けたものである。